

シンポジウム報告

12月10日(土)、八幡浜商工会議所にて、シンポジウム「八幡浜の文化資産を考える―日土小学校の再生を目指して」が行われた。この催しは、日本建築学会四国支部、日本建築家協会四国支部を中心として、地域の建築家、地元住民など、多方面の協力を得ながら実現したものである。このシンポジウムのねらいは、日土小学校校舎の将来について考えるための判断材料を、地域の人々に提供することであり、そこで私たちは、学会の第一線で活躍している、建築史・学校建築・木構造のそれぞれの専門家を招いた。ドコモモ・ジャパン代表である鈴木博之・東京大学大学院教授は、日土小学校の文化的価値は世界レベルで認められており、比類ないものであることを説明した。学校建築の専門家である吉村彰・東京電機大学教授は、既存の校舎を有効活用しながら、今日の教育ニーズに対応していくアイデアを紹介した。木構造の専門家である腰原幹雄・東京大学助教授は、日土小学校について、近代構法にもとづいて丁寧に建てられているので、必要な箇所に手を入れたなら耐震性能の回復は容易であると診断した。またこの催しのなかで、地元の検討グループによる、日土小学校の改修試案も発表された。この案は、日土小学校の校舎の歴史的価値を尊重しながらも、耐震・防犯を十分に考慮したものであり、新しい時代にふさわしい、新しい教育環境の整備を目指すものであった。対話の時間においては、愛媛県下や、八幡浜市において、文化財の保護にかかわってきた人々から、日土小学校校舎の存続にたいして共感の言葉がよせられた。このシンポジウムの参加者は200名を超え、地域住民の関心の高さを物語っている。また、日土小学校の保存改修を願うメッセージも国内外から多数よせられるなど(資料参照)、そのシンポジウムは、八幡浜市内外において大きな反響を呼ぶものであった。